

3. 意見交換

座長（千葉） 後半部分の意見交換に移りたいと思います。

先ほど、お3人の方々からそれぞれ熱のこもったご報告をいただきました。多分時間が足りなくて、まだたくさんおっしゃりたかったことがあると思いますが、これから1時間半足らずですけれども、いろいろ質疑、あるいは意見交換をしてみたいと思います。

司会の方である程度論点を整理すればよろしいのですが、話の内容が豊富過ぎるために、なかなかうまくまとめられないところでございます。ただ、私の方で個人的に感じたことを少し最初に申し上げまして、議論の口火みたいなことにさせていただければと思います。

その前に、今回、所外の方もたくさんいらっしゃっていますので、蛇足ですが申し上げますと、きょうご報告いただいた3人の方々のおられる農村については、私ども総研の調査のフィールドにさせていただいている経緯があります。

例えば、木村さんのおられる滋賀県愛東町を対象に、五、六年前ですけれども、営農主体に関する特別研究を行いましてその報告書を私ども研究所から出しております。

武井さんのおられます北御牧村につきましては、昨年度、科学技術庁関係のプロジェクト研究でもって、高齢者の介護システムに関する研究をしております。

それから、斎藤さんのおられます山形市ですが、これは山形県というふうに申し上げた方がいいでしょうが、もう既に十数年前ですが、私どもの支所が山形県の新庄市にありました。その関係もありまして、山形県をフィールドにしました調査、研究というのは、総研にとって一つの誇れる蓄積であると思いま

す。

以下、お三方から伺いましたお話について、こういうことが問題になったのかなということをやっと私なりに整理して申し上げたいと思います。

最初に、木村さんからまさしく活性化事業そのものについてのご紹介がありました。これは繰り返すまでもなく、建設省、それから農水省の持つ事業をうまく組み合わせる形で消費者に積極的に発信していく、そういう仕掛けを作ろうという試みだと思います。その中で、第三セクターと申し上げていいと思いますけれども、公社をお作りになって、去年から始めて、今後いわば経営的な問題等が出てくるのかもしれないけれども、非常に順調な滑り出しをしておられるというお話だったと思います。

それから、活性化という場合のいわば裏面ともいうべき問題として高齢者の問題がございます。これに正面から触れられたのが武井さんの報告でございまして、高齢化がどんどん進んでいく地域において、その農村の主人公である高齢者をどんなふうに地域社会としてケアしていくか、そういう問題について、歴史的な推移も含めましてご報告がございました。

それから、最後の斎藤さんの報告は非常に広い視野からのご報告でございまして、一つは、50年間にわたって農業に携わってこられた斎藤さん自身の農に対する歴史というものを、地域の農業の展開と絡み合わせながらご報告なさったわけでありまして。その中になかなか行政主体としては耳の痛い話もございましたけれども、一言で言えば、土地はかつての作るものから、いわば売るものになってきているんじゃないか、そういう根本的な批

判をお持ちであったようです。

その中で斎藤さんご自身は、いわゆる心豊かな農業を目指して現在頑張っておられる。もう一つ印象的でございましたのは、全国的なネットワークを斎藤さんご自身がお持ちでありまして、その中で非常に広い視野から農というものを考えておられる。農民から百姓に変わるんだ、そういうふうなお話がありました。

この農の持つ意味というようなことは、実は武井さんが最後のところでもおっしゃっておられましたように、教育などともかわりがございますけれども、そもそも農をやることの意味が現在まさしく問い直されているんじゃないかということで、活性化の持つ一番根本的な哲学みたいな問題もやはり考えざるを得ないだろうということです。非常に雑駁な取りまとめですけれども、以上そんなことが印象に残った次第であります。

以下、質問、それから意見交換に入りたいと思います。どうぞご自由にお手をお挙げください。

宝田（駐村研究員） 木村さんにちょっとお伺いしたいんですけれども、たまたま私の方も第三セクターで、直売所等をやって、商品開発とかやっておりますので、非常に興味があるということで、説明していただいたんですけれども、よくわからない部分が、農協の直営分と商工会に委託している分と、それと公社が直営でやられている部分の関係です。

資料を見る限りでは、直売館の方が農産物等を農協で販売して、1億8600万円ですか、かなり売っておられる。あと、食べ物の方は、民間の業者さんがテナントで入っているということだと思いますけれども、そうすると、公社の方が、新しくできた田園生活館の方でどういうものを販売されているのでしょうか。多分ハーブとか、ドライフラワーとか、その手の新しい商品開発を主にやっているよ

うに見えますけれども、その辺が、例えば直売館の方とバッティングすることはないのかどうか。その辺をお伺いしたい。これが1点です。

それから2点目に、私も今、実際三セクの経営の方を携わってまして、いわゆる給与の問題があります。経営的にみて、人件費がかなりのウエートを占めてまいりますが、一般的には役所の給料というのが地方ではかなり高いということで、高過ぎるという批判もあります。ですから、3セクの場合は民間と役所の中間ぐらいをとる例が多いんですけれども、うちの方は大体民間に近いような形、田舎の地方なものですから、かなり安いんです。そういう形で給与体系を組んでいますけれども、愛東町の例では、その辺がどういうぐあいになっているのか、興味がありますので、お伺いします。

木村 第1点目の運営形態でございますが、マーガレットステーション全体の施設については、財団法人愛の田園振興公社が管理をしているということですが、その中でも、レストラン部門については商工会の方へ全面委託しております。ただし、商工会としても商工会自体で経営はできませんので、一部の業者の方に再委託して、その方がこのレストランを運営しています。それから直売館につきましては、施設の管理だけは財団法人がやっています、職員は財団法人から2名派遣しているということで、ただ、その運営については、先ほど言いましたように農協が私の町は二つありますが、そこへ委託をしておることになります。その農協が2農協ありますので、なかなか一緒になってうまく運営できない。

例えば、先ほどは公社が2人派遣していると言いましたけれども、本来は農協が人を雇って、そして運営をしてもらいたかったわけですが、何せ2農協ある関係から、どちらが主に運営していくのかという問題がありまし

たので、事務局はある程度愛東町にかかわり農協の方に主体的に事務局において運営協議会という組織を作って、そして運営しているということになります。

運営協議会については、特別会員と一般会員との二つで組織を作っているんですけども、特別会員は町と農協と振興公社と、それから農業指導センターが特別会員ということで入っております。それは別に会費も何も納めておりませんので、事務局的存在としての特別会員であります。

それから一般会員については、農家から会員を募集して、申し込まれた方が一般会員という形で入って、その特別会員と一般会員が集まって運営協議会というのを作り、その運営協議会が施設の運営を全般にやっているということです。ですから、売り上げはすべて一たん運営協議会に入って、その運営協議会で売り上げの10%だけを差し引いて、農家の口座にすべてほうり込むわけですが、あとの10%については、先ほど言いましたように生産手数料という形で2%が農協に入りますし、あとの8%で財団が出向させています職員の給与なり、それからこの光熱水費とか、そういうものをすべて賄うことになっています。

今のところ、1月末現在で1億8900万円ほど売り上げができて、その10%ですから、1890万円ほどの収益、手数料が入ってきたわけです。500万円ほどの黒字で、今ちょっと税金を心配しています。ことし、どうも税務署が入るような動きがありますので、どうしたものかなと考えています。今のところ償却のことも考えておらずに、行き当たりばったりで動いておりますので、どうしたらいいものかなということでございます。

一応財団については、ハーブとか、それからドライフラワーとか、そういうものを今は仕入れでやっておりますけれども、それを販売するショップと、それから湖東地域の特産

物を販売するそういうショップ、それだけの売り上げで今、財団法人の運営をやっているということですから、非常に厳しい。

また、工房ということで、財団法人がショップで販売しております、例えばハーブとかドライフラワーを使ってリースの教室をしたり、そういうことはやっていますけれども、その売り上げというのはもう微々たるもので、大半が地域の特産品の販売高と、それからハーブとかポプリの販売ですね。そういうものの売り上げで今息をつないでいるというような状況でございます。約50坪ほどの売り場面積で全体の施設を賄っていかなければならないということになりますので、かなり厳しいことが予想されると思います。

それと、給与体系でございますけれども、今のところ職員については、館長、それから販売チーフ、それから管理チーフの3名は正職員で雇っておりますが、あとの販売員、女性の方が、直売館も含めて8人いるわけですが、その方はすべて臨時職員です。臨時職員は大体時間650円。正職員の方は、これもなかなかよい見本がありませんでしたので、役場給与体に大体合わせました。人勤にあわせて、すべて人勤と同じく上がるということです。

ただ、努力すれば努力しただけは、やっぱりその恩恵をこうむっていただくように、ある程度売り上げが伸ばせれば、それだけ給与も上げられるような体系をとっていかうということにしてあります。しかし、売り上げが伸びず、赤字に転落した場合には、給料のある部分がもらえなくなるというような状況もなきにしもあらずということで、公務員とは違って非常に厳しい。役場が作った施設ですので、どうしても甘えが出てくるわけですが、今のところ、町からは一切負担金もなし、委託金もなしということで進めており、今のところ物も言わずに頑張っていたいているというのが状況でございます。

座長 宝田さんいかがでしょうか。よろしいですか。何か関連してありましたら、どうぞ。

石畑（農林中金総合研究所） 全体の事業費用がトータルしますと約9億円ぐらいで、出捐金として資本に当たる部分が7500万円ということなので、残りは8億円ぐらいの借り入れということになるかと思うんですけども、調達はどのような形でやられているのかなというのが一つ。

もう1点は、金利の負担なんかが相当これからかかってきたり、あるいは減価償却といった形で、特に集客施設の場合には、長い目で見ると改装であるとか、あるいは設備をどのような形で陳腐化させないで新しく維持していくかというのが非常に課題になってくるかと思うんですけども、その辺はどのように考えておられるのか。

木村 全体の事業費につきましては、事業費ベースで9億円。そこへ町費で1億何がしかの備品購入、それから1億2000万円ぐらいで土地の買収をしておりますので、全部で12億円ぐらいの予算をつぎ込んでおります。そのほかに出捐金がございますので、13億円ぐらいの予算になっていると思います。

ただ、事業費ベースの補助金の割については、2分の1を県と国の方で賄っていただきましたので、残りの半分については、平成5年の第3次経済対策で4億円ほどいただきました。残りは町費で負担するわけですが、半分を起債で対応して、国税算入していただけるというようなことを聞きましたので、結構補助率の高いようなものになるのかなということです。補助の残りのものはすべて町費で負担しているというようなことです。償却なり、金利の関係も言われたんですけども、今のところ、まだそこまで行っておらずに、役場の施設ですので、償却は見ずに、とんとんでいけたらいいのかなということです。もうけるということを、今のところまだ考える

余地がないというのが実態でございます。ただ、収益事業でうまくいけば、公益事業の方へ何か転換するような方向に行けたらなということで考えております。

大脇（農村開発企画委員会） 今のお話に関連してちょっと教えていただきたいんですが、このごろ活性化事業ということで、いろいろなニュービジネスというんですか、例えば民宿なども含めて、各種の事業を起こしておられるところがあります。例えば農家民宿なんていうふうなものをスムーズに展開していくためには、個々の農家の主婦の方が朝昼晩3食つくってお客さんにサービスするなんていうのはとても苦痛なんだろうから、やっぱり地元プロのケータリングサービスというんですか、給食サービスができるような人を育てておいて、初めて村全体としては民宿経営とか、そういうふうなグリーンツーリズムなんかの方もうまくいくというようなことがあるんじゃないかと思うんですが。

そういうふうにして考えますと、そういういろいろの施設なり企業なり関係者、あるいは場合によったらボランティアの方だとか、別途のそういう民間の事業をやっている方なんかもトータルに絡めて、村としてなり、地域としての活性化を進めていく上でのそれぞれの役割分担みたいなものを検討していくことも必要になってくるんじゃないかと思います。

こういった点について、何か工夫をしようとしておられるようなことがあるかどうか、あるいは何かそういうことについて、将来の我が村はグリーンツーリズムでいくんで、こういうサービスが足りないからとか、あるいはこういう機能を補強しなきゃいかんとか、そんなようなことを計画したり考えたりする、あるいは調整したりするようなファンクションをどこかでお持ちでしょうか。また、あるいはそういうものの必要性についてどうお考えになっているかというふうなことを、ちょ

っとお聞きしたいのですが。

木村 難しくて、ちょっと回答になるかどうかわかりませんが、最後に今後の展開という中でちょっとお話し上げたいと思います。もともとマーガレットステーションを当初建設しようとしたのは、都市と農村との交流ということを前面に出していきたいということでございます。それには何が必要なのかということで、いろいろと考えますと、やはり滞在していただく、愛東町へ来てゆっくり楽しんでもらうには、滞在型でないといけないということで、当初はやっぱり宿泊施設を検討しておりました。

ところが、いろいろ先進事例を見させていただきますと、宿泊施設は非常に地理的条件のいいところでは成り立っております。ところが、愛東町は非常にきれいな農村風景で、素晴らしいところですよといって来ていただいても、恐らく全国に農村風景というのは津々浦々ありますので、愛東町だけが農村風景ではないということになって、中止したという経緯がございます。

ところが、こうやって今まで事業を進めてまいりますと、今おっしゃいましたように、グリーンツーリズムというような中では、都市の方が農村へ来てゆっくり滞在して農業を楽しんでもらうということが、これからやっぱり必要になってくようという思いを感じています。ただホテルなり宿泊施設を単に建てるということじゃなしに、主を体験に置いて、そして、そこで体験しながら滞在してもらうといいますか、そういう施設が今後必要になるのかなということで、これはまだ先の話になりますけれども、クラインガルテンですね。農園つきのコテージなんかをこれから整備していきたいな、そういう方向に向いていきたいなということを、今考えております。

今井（農水省農業研究センター） 先ほどの愛東町の事例について農業との関係で、一、二お伺いしたいと思うんです。

一つは、メインであります販売の果樹の方について、ここで売ることが農家にとってどういうメリットとなってきたのか。と申しますのは、今かなり果樹農家でもいろんな販売形態が、みずから売ったり、市場に出すだけでなく、スーパーに出したり、いろいろあると思うんですが、ここで売ることのメリットというのは、具体的にどういうことなのかということが一つ。

二つ目は、野菜の方も予想以上に非常に売れているということなんですが、一つは、多品目少量生産育成事業でやってきたんだけど、市場価格が余りよくなかったというふうなお話なんですが、その場合に考えられるのは、ロットがそろわないからということもあると思うんですが、品質が、少量多品目生産の場合には品質そのものがなかなかそろわない、市場の期待にこたえられないという意味であることもあると思うんですね。そういう意味で、ここで売の場合の、例えばですが、有機野菜など技術指導面において、ほかにないものということでの工夫なりを行ってきているのかどうか、それが二つ目です。

それから三つ目は、この野菜とかかわってですが、今どこでもそうですが、担い手、すなわち一体野菜をだれが作るのかという深刻な問題が実際にはあるんじゃないかと思うんです。お話では、種もさばけたという話なんです。いわゆる施設園芸等の専門的な農家を育成ということになるのか、あるいは農家主婦なりの、規模は小さくても地元の労働力を生かしていくものということになるのか、その辺についてちょっとお聞かせ願いたい。

木村 果樹をここで売るメリットということでございますが、一番恩恵をこうむっているのはメロンです。4万平米ほどの施設が愛東町にはあるわけですが、そこでメロンを約4万個ほどつくっています。それを市場へ出しますと、1個700円ぐらいにしか売れません。アムス系のネットメロンですので、商品

価値といいますか、高級感があります。お客さんの大半はお使い物ですね。お見舞とかお中元とか、そういうものにお使いいただいています。結構値が張りますと持っていったかいがあるし、もらった方も立派なのをもらったなというようなことがあって、何か直売館で飛ぶように売れているというようなことです。

ですから、メロンの場合はほとんど 100 % 直売ではけております。去年まで、テント張りで売っていたときには、朝来て、9時から開けて6時に終わるわけですが、この直売館ができてからは、9時に開店しますと1時間足らずで売ってしまうという非常な盛況ぶりでございます。メロンを売っているのに、何でメロンがないねんということで、10時以降はお客様に対して頭を下げて謝る一方というようなことで、非常にうれしい悲鳴であったわけですが、そういう形で、メロンの場合はここで売るメリットというのはかなり高いわけです。それからナシ、ブドウについては、主に市場出荷しております。ブドウの場合は大体8割が市場出荷で2割が直売で、ナシの場合は、3割が直売で7割が市場出荷ということです。この施設では大量にははけませんので、市場に主軸を置いております。ただ、お客様の方もおいしいナシ、あるいはおいしいブドウだということで、かなり遠いところから、大阪から、あるいは三重とか奈良とか京都、そこらからわざわざ車で買いに来ていただけるということがあります。そういう面では、結構愛東ナシ、ブドウも定着してきましたので、できるだけ直売ではけるものはかして行って、市場と並行的に販売していきたいなと思っているようなところでございます。

それから、多品目野菜の話でございますが、確かに言われたとおりロットも少ない。それから少量ですので、品質もなかなかそろわないということがございます。ですから市場の

方としては、大量にそろうと値もつきやすいけれども、少量でございましてなかなか値がつきにくいということでございます。ですから農家の方は、先ほど言いましたように、農協の方には悪いんですけども、農協の手数料なり市場の手数料なりそれから運送賃を引きますともうほとんど入ってこない。

笑い話ですけども、いつかカボチャを1コンテナ出した。市場へ出して通帳を見たら60円ほどしか入ってなかったというようなことで、これも何やら皆吸われてしまったなということがありましたが、それをこの直売所で出しますと、市場価格よりも高く、小売りよりも安く、大体市場と小売の中間ぐらいの値の設定をして販売してもらっております。10%引いても結構農家の売り上げにはつながっておりますので、そういう面では、この直売所は農家にとってメリットはかなりあるように思います。ただ、今のところ有機とか、そういう面での取り組みはまだしていません。

消費者のニーズというのは、そういう安全性の面で非常に強くなってまいっておりますので、これから有機低農薬で野菜づくりをしてもらおうかなということですが、ただ、今のところ朝採りですので新鮮、安いということですね。そういうものが効を奏してといえますか、これも大体20キロメートルの範囲内のエリアの方がかなり買いに来てもらっておりますし、「道の駅」ですので、各地の大型トラックに寄っていただきますが、大型トラックの運転手さんも家の野菜の買いだめにたくさん買ってもらうということで、かなり消費していただくエリアも広がってきているようなことでございます。

それから、この多品目野菜の生産をしていただける方については、主に高齢者の方と、それから主婦層です。兼業化がかなり進んでおりますので、この程度といいますと申しわけないですけども、この程度の販売では、

なかなか生計を維持していくまでにはいきません。野菜とかナシ、ブドウ、メロンを除きますと、平均で大体 40 万円ぐらいになると思います。ちょっとした小遣い程度、多い方ですと 100 万円ぐらい上げておられる方があります。

この間も、専門的に白菜をつくっておられる専業農家があるんですけれども、その方は、こしは主を直売に置いて白菜以外で、例えばスイカとか、軟弱野菜を中心に頑張ろうということで話をされておりましたけれども、これができたおかげで今まで作っておられない方がまた新しく作るとかいうところはかなり出ておまして、普及所の方にも、初めて野菜を作りたいのだけれども、どうしたらええやろということで、結構問い合わせがあります。なぜかと普及所が聞きましたら、直売所で売るんやという話のようです。

農協にもかなりの相談が行っておりますし、種も結構売れていますので、こしはかなり出てくるかなと思います。その調整をどうしようかなと、今ちょっと頭を痛めているようなところです。余り同じものがそろいますと、だぶつきますので、そこらの調整をうまくしないと、またいろいろと問題が出てくるのではないかなということでございます。

安橋 武井さんと斎藤さんにお伺いしたいと思います。

まず武井さんの方ですけれども、千曲川中流域で養豚をやっているということ、排水問題など公害の方の問題についてもいろいろと気を使って経営をなさっているんじゃないかと思いますが、そちらの方の特に排水問題の方はどのような工夫をなさっているかということが第 1 点でございます。

第 2 点は、今後、養豚の方の経営を拡大していこうと考えていらっしゃるのか、現状維持だというふうに考えていらっしゃるのかということについてお伺いしたいと思います。もし拡大してくということであれば、売り先な

どについての新しい展開を何か考えていらっしゃるかどうか。もし現状維持ということでございますれば、その拡大しない場合のネックは、どういうことで現状維持だというふうに考えていらっしゃるかということです。

それから、斎藤さんにつきましては、余り詳しくお話しただけなかったんですが、斎藤農園という果樹園で、いい経営をしていらっしゃるんじゃないかというふうに推察だけしたんですが、その経営の中身についてお話しいただければと思います。ひとつよろしくお願いします。

武井 番屋川という川も千曲川に流れ込むんですが、その番屋川の崖の上の方にうちの養豚場があります。それで、排水とか汚水は出さない工夫をしていて、おがこ養豚をやっています。そして、農協から堆肥の発酵剤を買って、その発酵剤で堆肥をできるだけ早く作る工夫をしています。小型のシャベルローダーで堆肥を積み出した後、新しいおがこを入れて、新しい子供を入れて循環させています。

現状維持か将来拡大するかということです。が、昨年の 1 月で拡大の最終が終わりました。1 豚房 50 頭から 60 頭入るハウス型の養豚場を 5 棟つくって、そして 130 頭の親から年間 20 頭前後の赤ちゃんをとって、そして落ちるのもいるんですが、出荷が 2000 頭を超えるという計算です。最後の拡大が終わりまして、このまま現状維持で、あとは落ちないように工夫しながら、寒い信州で養豚場を少しの間、少しでもないかな、続けていくつもりでいます。

5 棟の豚舎でちょうど最終的に活用する土地が終わりました。あとは、よその土地、山をまた切り開いて石を出して、そして木を倒してということになりますから、資金、それから人手の面で足りないかと思うので、ここ何年かは現状維持でいきたいと思っています。

斎藤 私のところでは、6月ごろにこれまでのお客さんに案内を出すんですけれども、一番最初は梅から始まって、梅も漬け梅とか、それから白加賀、加工梅とかあるんですが、その後はサクランボ、その後はプラム、これも8種類くらい作っています。

それからその後ですと、庄内柿になりますかな、それから和ナシが3種類、4種類ぐらい。リンゴも5種類ぐらい植えていますし、その後はラ・フランス。それから、洋ナシが2種類ぐらい。その後はクリ、キウイフルーツ、それから干し柿という形です。ただ、たくさん作っているのはプラムで、今3反5畝ぐらい作っています。それは農協にも半分ぐらい出荷しますが、あとはほとんど産直で、そのほかの品物は全部産直です。

野菜なども作っているんですけれども、これは週に1度、仲間て県の共済組合の駐車場を借りまして日曜日に朝市をやってみて、そこで余りよくない果物や野菜をそこで売っています。私はあくまでも顔の持つ関係ということで、果物についても生産者のメッセージを必ず入れて、私が苦労した話なり、あるいはどういう農薬を使ったとか、もちろん減農薬を主体にしているわけですが、必ず私の農民としてのメッセージを入れて送っています。

それから、値段の方は、一応めどとして申し込みをとるときに書くんですけれども、あとはこっちの方で勝手に決めさせていただいて、それで振替書を入れて勝手に送ってもらうという関係です。

果物について、私の周囲でも、また遠い人でもそうですけれども、余り好きでなかった人が、君の果物を食ったら、果物がおいしくてこたえられないということで、そういう点では果物の持っている神話みたいなものを、私はもう1度作り出したんじゃないかというプライドがあります。

それから、もちろんそうやって売るの

くさんあるわけですがけれども、4分の1ぐらいは日本全国の仲間がいますので、そこへ送って、そのかわりに日本全国からいろいろなものをもらって、いわゆる物々交換というふうな形をとっております。

それから、米の方は2反歩だけ自然乾燥しまして、それは自家用に充てているということで、お金はなくとも豊かな暮らしをしたいというのが私の信条です。

相川（農業総合研究所） 武井さんの高齢者問題と斎藤さんの生活記録運動から有機農業に至る半世紀について、多分座長は、テーマである地域活性化とどう結びつけようかなと考えておられると思います。その点について、戦後の農民の社会運動を私は研究テーマの一つにしておりますので、ちょっと関係づけをさせていただきたいと思います。

農民の社会運動というのは、50年代は生活記録運動です。60年代は、これは上からの米価闘争なんですね。70年代から80年代前半が反公害、有機農業です。それが一つと、あと環境保全運動です。そして、80年代後半から高齢者問題になっていくんです。このうち運動を盛り上げる条件として、一つは、生態学者のザハビーというのが言っているハンディキャップの原理というのがあるんです。これは例を言いますと、クジャクの雄があれだけ華麗な羽根を持っているのは、生存競争の上から言えば非常に不利である。ところが、雌から見れば、そういう不利な条件の中で雄々しく生きている雄はたくましく見える。したがって、進化の法則から言えばクジャクの雄はますます着飾る、そういうのが進化のメカニズムということですね。つまり、損得勘定でない理念というのを一つつかみ出すことが必要だということです。

社会学者は、それをこういうふうの説明します。時代の変革をつくる理念は、その理念がその時代の新しい時代の経済状況に合ったときに初めて時代を変えるイデオロギーにな

る。つまり、理念と経済的条件の二つが合致することが必要なんです。

そういう観点から生活記録運動というのを見てみますと、これは二つの要素を持っています、一つは民主化、近代化の理念ですね。閉塞された時代を生きてきた解放の時代なんです。それで、伝統的な因習と戦うのを目的としていたのです。

もう一つは、反米、反資本主義です。これは土俗の精神という農民魂と、もう一つは左翼教師とかいう左翼インテリがリーダーとして合体したものでした。米軍基地もありましたし、反米、反資本主義というのがリアルな問題として実在したのです。この二つが生活記録運動の構成要素です。これが第1期です。

ところが、高度経済成長期になると、特に近代化がおのずと実現される中で、生活記録運動というのは雲散霧消するんですね。そして、70年代になるとそういった近代化に対する反省が生まれてくるわけです。それが有機農業なり環境保全運動の起きる契機です。星さんとか斎藤さんなんかもそういう中で前代の生活記録運動の理念を引き継いで有機農業に入っていくわけです。これが見つけ出した理念は、いわゆる食の安全という理念。これが作り出した方法は、市場によらないネットワークによる販売。これの一番の典型が生協運動ですね。生協運動は70年代、80年代が黄金期でありまして、加入人員千数百万、販売額で言うと全体の3%、野菜で言えば4、5%ですね、そこまで伸びる。それが第2期です。

第3期は高齢者福祉で、これは80年代後半から来るんですね。北御牧村の運動なんかも、実は保健、健康から食の安全、有機農業、手づくり食品という形から、最後に高齢者問題に行き着くわけです。

これは、一つは近代化主義、生産第一だけでは取り残される問題、それが高齢者問題な

んです。したがって、近代主義、生産第一、経済効率主義だけではだめだというのが1点です。それともう一つは、やっぱり日本は物的整備がおくれています、都会並み、欧米並みのそういった保障、生活環境が必要だという、そういう二つの理念なんです。高齢者問題については、これはただ、1997年に介護保険というのが出てくるんですね。したがって、今までは経済的な裏づけがなかったから、いわばほとんど見向きもしなかったことが、一挙に巨大な市場が実は開けつつあるわけです。

これについて言えば、今までは公的機関とか、あるいは医者、こういった人たちが、いわばリスクを負って参入・推進してきたわけです。だが、経済的裏づけができることで、企業とか一般のいろんな参入者がこれからわんさと入ってくる。そういう中で、どういうシステムをここで作っていくかが今課題になっています。

そういうふうに位置づけられるということで、ご参考までに解説いたしました。

座長 ありがとうございます。愛東町について、先ほどまとめていろんな質問がございました。そして、愛東町については、先ほども言いましたように、総研ではまとまったフィールドワークをやっておりまして、その後も調査を継続しております。

それで、生活の問題が出てきましたので、先ほど補足資料が配られていたと思いますけれども、石原さんの方から何か関連して質問がありましたらお願いいたします。

石原（農業総合研究所） ご報告いただいた木村さんに協力していただいて、去年の夏に愛東町の住民意識調査を実施した結果を、参考資料にして配布していただきました。10年前にも同じような項目の意識調査を実施しまして、その結果とあわせて簡単にまとめたんですけれども、自分の手元にその資料はなくて、むしろ木村さんに補足的に一つお聞き

したいのです。

10年前と比べて幾つかの調査項目の中で、ここでは年齢階層で10歳刻みにとっておりますが、世代による意識の持ち方の開きがより顕著になっているということと、世代と深く関係しているんですけれども、農業従事者において非常に特徴ある意識の持ち方が見られています。

例えば参考資料の町への愛着、これは集落への愛着と質問項目を変えても同じような結果が出ましたが、世代的に開きが大きく出る理由が何か特別な理由があるのかどうか。農地の保有に関する意識調査の項目についても前回よりもさらに顕著に世代間の開きが出ているように見受けられますけれども、何か町の農業関係者の実態との関係でお気づきになる点がありましたら、少し補足していただきたいと思います。

木村 住んでよかった、住んでみたいというまちづくりを目指して、今、愛東町は町づくりに取り組んでおります。ただ、若い世代の人については、やはり医療機関がないとか鉄道が走っていないとかで、かなり不便さがあります。それからショッピングセンターが遠いとか、そういう面でなかなか愛着がわかないといえますか、そういう面が出ているのではないかな。若い世代の人にはどうも愛着がわかないような面があるのではないかというふうに思います。

ただ、町全体は暮らしやすいですし、非常に農村らしさが残っておりますので、高齢者の方については暮らしやすいのではないかなと思いますけれども、若い人については、今申し上げましたようなそういう不便さを感じられますので、そういう面ではやっぱり愛着がわかないのではないかなと思います。

それから、土地を末永く守っていかなければならないかということですが、最近の若い人は本当に百姓しませんね。私は今43歳ですが、何とかやっております。営

農組合というのがありましてオペレーターをしておりますので、そこそこ農業についてはやっているつもりではありますけれども、20代の若い人、30代の前半の方、若い人はほとんどもう農業をやらないですね。農業をするんだったら家を出ていくという人が多いですね。ですから、午前中の駐村研究員の打ち合せ会議のときに、高齢者の方が補完的な作業をやっておられるという話を聞きましたが、うちは高齢者の方が主に農業をやっておられ、若い方はもう知らん顔やというように見受けられるところがあります。そういう意味では、もう土地を守ることじゃなしに、自分が好き勝手に生きていくという方向の方が強いのと違うかなということです。ただ、土地だけは資産的な価値がありますので、なかなかすぐに手離すということではないんですけれども、それは農業にやる気のない人にかわって作ってもらうという方向に、最近動きかけているように思います。

座長 愛東町を継続的に調査しているサイドからの質問がございました。

ちょっと総研のPRみたいになっちゃいますが、長野県の北御牧村については、レポートが幾つか出ておりますけれども、ご参考までに一つご紹介しておきます。先ほどコメントがありました相川研究員の方で、「農業と経済」という雑誌の今年の12月号に、この高齢者福祉の活動について共同執筆でもって論文を出しておりますので、ご関心があれば後でお読みいただきたいと思います。

ということで、ちょっと水を差したかもしれませんが、以下いろいろご質問を含めまして、意見交換を自由にしていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

田畑（農業総合研究所） 武井さんにちょっとお聞きしたいんですが、先ほどの話で、この地域は農業を継ぐ人がいなくなって久しいというような話をされていました。それで農業をやってくれる人が出てきたら、外から

来てくれたら非常にうれしいというようなお話をされていましたが、都会に住む人で、農業をやりたいという人が今全国的には随分たくさんふえていると思うんですね。武井さんの近くにそういう方がおられるかどうかちょっとわかりませんが、全国的には随分ふえている。ただ、そういう希望をしても、自分でその土地を買ってとか借りて農業を実際にやるには、いろいろ障害もたくさんあって難しいので、希望してもできないというのが現実だと思うんですが、ただ、傾向としては随分ふえてきているように思うんです。

それで、そういう希望者がいれば、武井さんの村で生活する立場からそういう人をどんどん受け入れるというか、そういう人が農業をやることに對して協力するというような、そういう感じで見られているかどうかという点が質問の一つです。

それからもう一つ、農業者年金では今まで農地の権利を持っていない女性の場合は、農業者年金には加入できないというような制約があったと思うんですが、昨年の農業者年金の改正で、女性の場合も、経営者と一緒に経営をやっているという、協定を結べば年金に加入できるというような仕組みになってきたんです。武井さんの場合、既にそうなっているかどうかちょっとわかりませんが、もしそういうようなことになれば、積極的にそれをやっていくというぐあいに考えられているかどうかというあたりについて、お聞きしたいと思うんです。農業をやっている女性の地位の向上というか、その改善というか、そういう点についてどういうぐあいに考えておられるかということについて、お聞きしたいと思います。

武井 まず最初に、農業後継者が欲しいというところからですが、長男にお嫁さんがいない場合、それから長女、後継ぎ娘にお婿さんが来ない場合、そういうのを農協か

何かが全国新聞で発表して、農業後継者のところへ結びつけていくというのが一つあると思います。

それと、家族で農村に移住して、そして農業に真剣に取り組むという場合と、そこに住んで、例えば農協に勤めて、その農協から派遣されて水田をやる、果樹をやる、そのほかの野菜をやるなんていうことになるか、そういうあたりはちょっと私もわからないんですけども、もし本当に農業をやりたいという人が全国的にふえていたら、多くの日本の農村地帯は歓迎をするだろうと思います。それにはやはり村が住宅を作って、受け入れ態勢を整えるか、空き住宅をきれいに改装するか、それから農協へまず勤めてもらい、そこから派遣されていくか、これから知恵を出し合って考えていってほしいなと思います。

それともう一つ、農業者年金の件については、私もそれは知らなかったんですけども、うちの村でも女の人が農業の6割ぐらい支えているかもしれない。男の人は土日が主な労働日で、機械を使ってやってくれると思いますけれども、その合間の時期は、女の人の肩にかかることがうんとあります。だから、女の人が重労働となって、結局、鉄が足りなかったなんていうことも今まであったのかもしれないんですね。同じ食事を食べていても、男の人はそういうクレームがつく人は少なかったんです。女性の体の問題もあると思いますけれども、やはり女性への労働力負担というのは、農村ではまだまだ大きいと思いますから、もし年金に加入できるというならば、でも、年金に加入できるということは、掛金を今払うということですね。

田畑 加入したら払わなければいけませんね。そのかわり年金を受け取れる。

武井 今、年金に幾つか入っていると思うので、個人的には余裕がないかと思っています。でも、これは若い人たちが、本当に女の人が支えているところもままありますからね。働き

ながら、パートの職をしながらやっている人もいるし、やはり地位の向上というのは本当にすばらしいことだと思いますしね。女の方は農村で地位が低いと思われるかもしれないけれども、でも割とかかあ天下が多いかもしれません。それは、農業は私がやっているのよという自負がやっぱりあることにつながるかと思います。

大脇 3人の方にちょっとお聞きしたいんですが、自分の地域の将来の農業とか村づくりとか土地利用をどのようにしていきたいとかいう、そういう村づくりのビジョンというようなものとか、計画づくりに地域の人々がどのようにしてかわれるようにしていってほしいだろうかというようなことについて意見を賜りたいわけですがね。

現状において、地域に住んでおって、おれの農業どうするんだとか、この地域をこうしていきたいんだというようなことについて、発言するチャンスがそれぞれ本当にあるのか。また、あっても、なかなか斎藤さんの先ほどのご報告なんかでも、普及員だとか村の農協指導員がリードしてやって、本当に意見が反映されるのかというようなお話もあるようです。

最近はそのように、私どもも、関係者が、農業者だけでなく、非農業者も含めて、我々の地域をどうしようかというふうなことについてのワークショップの勧めなんていうようなこともやっているんでございますけれども、そういうことに関連して何かいい知恵がないかというようなことをお聞きしたいんでございますが、何かお気づきの点がありましたら、コメントしていただければと思います。

木村 回答になるかどうかわかりませんが、私の町では、以前に技術員連絡協議会という組織がございまして、農協と普及員と、それから町で集まりまして、まちづくり、農業の振興についていろいろと討論していた

んですけれども、この組織については、どうも町が進める事業を報告して、何も意見が出ないままに終わるという形式的な組織になっておりました。それを改めまして、ここ十数年前から農業指導センターという組織、先ほどちょっと出ておりましたけれども、その組織を作ってきました。

これには、やっぱり農家の意見をよく吸い上げていく必要があるという面から、農家の方の代表に入っていただきました。農協は技術サイドの方、それから普及員、町は産業振興課の関係職員が入って、そこへ農家の方、女性の方を含めて8名の方にお入りいただいて、愛東町の農業をどうするのかというようなことをいろいろご討論願っております。

最近、農業には非常に厳しい面が出てきていますし、愛東町の農業をどうするのかという点では、この指導センターが主になってシンポジウムを開いたり、それから今、愛東町の農業推進大綱というのを作っているわけですから、3年計画で実現可能な事業をやるということ、その立案、あるいは検討についても、その指導センターに提案して、そしていろいろご意見を伺いながら進めています。

武井 私にとってそれは非常に難しい質問です。ただ、私が知っている一つの例、老人介護施設を考える会から、それを2年後には作る会に成長、発展させて、デイケア施設を作って、それから多くの住民、それから保健婦さん、農協、役場、議会、みんなで集まってみまき福祉会という福祉法人を作って、そういう動きの中でそのときにいろんな意見が出されて、練られて、そういう一つの大きな建物ができ上がったということがわかるだけで、どんな委員会が作られているかということとはわかりません。

斎藤 大変難しい質問ですけれども、私も物心ついた10代のときから、私の住んでいる地域を、日本にこんないいところはない

んだ、ここに来てみなさいよ、そういう村を作りたいというのが、50歳過ぎまでずっと私の心に燃えた一番大きな願いでもあり、私の夢でした。

しかし、なかなかそれは大変です。特に近年はお金をもうけるかどうかということが、生き方の非常に大きな基準になってきた。そういうこともあって、なかなか村の中で理解してもらうことができないし、村はもともと自分の暮らしの根っこであったはずなんだけれども、今は寝場所にしかすぎなくなっている。夜帰ってきて寝るところ。昼間は町に行ってお金をとってくるということになっていて、いや、私は本当に悲しくなっていました。

これまではサークルとか青年団とか村の農協とか、いろんな運動にずっとかかわってきたんですけれども、私ももう50歳過ぎて、力を出し切るのが、むずかしくなってきました。生まれたときも1人だから死ぬときも1人だし、やっぱり個人の力で生きて、その姿を見て、少しでもそれに共鳴する人がいるならばという思いで今生きているわけですから。

私のところにはいろんな人が来まして、例えば昨年、一昨年は京都とか東京とか、そういうところから人が6人ほど来て田植えをしたり稲刈りをしたり、それから去年は中国から早稲田の大学院に留学している女の子が来て、その人なども初めて農業をやって、いや、農業というのはこんなにすばらしいものかという感想を私の雑誌に書いてくれたわけです。本当に自分が手足を動かして暮らす感動というもの、今は忘れられているんじゃないかというような感じがしています。今こそ人間にとって農の意味というか、人間にとって土を耕し、作物をつくって生きるということが一番大事な人間の営みなんだということを少しでも知ってもらわなくてはならないというふうに思いながら、いろんな問題にか

かわっています。そして、非常に少数であっても、それぞれの村や地域の中で、農の仕事、意味というものを大事にしていく人を育てていきたいなという思いでいるわけです。ただ、私はこれまでいろいろな団体の中で中心になって活躍してきましたけれども、今は個人の力でやれるところまでやろうと思っていますし子供たちもそういう親の生き方を理解して、いずれは村に帰ってくるだろうという気持ちです。

出山（駐村研究員） 武井さんの話の後継者の問題に関連してお話いたしますが、私のところに農工大の学生のころからずっと実習に来ていた人が、大工さんの息子さんですけれども、どうしても農業をやりたいということで、静岡の掛川でトマトの栽培を始めました。その人が、奥さんは学校の先生なんです、3年前に1人で畑を借りてトマトを作り始めまして、去年すごくおいしいトマトができたということで送ってきてくれたんです。正月の2日には夫婦で私のところに、自分たちの手づくりのみそだとか野菜を持ってきてくれました。そういうことで、学生時代に自分がどう生きるかということを決める青年たちが、まだ結構いるんじゃないかなと思います。それから、私は今、千葉県で牛を飼って生活をしています。22人で新しい組合を作っていますが、ほとんどの人に後継者がいます。やはり親が楽しくやっていたら、後は必ず継ぐだろうということで、親がうんと楽しく、ヘルパーも十分使って楽しくやって、それにはいろんな仕様技術その他きちっとしたものを身につけていかなきゃいけないんだ、今までの情性でやっていたんではいけないんだ、勉強していこうというふうなことであれば、後継者が出てくるのではないかと思います。ただいない、いないというのではなくて、新しくやりたい人もいるでしょうし、もしも自分の経営を継いでほしいというのであれば、まず自分たちが楽しい経営をやる。

そのためには何をやらなければならないかということの勉強はしなければならないと思います。

それから、木村さんのお話は、非常に興味を持ってお聞きもし、いろんな資料を見せていただいたんですけども、たまたま私もおとしから同じような事業にかかわっているので紹介をさせていただいて、もし参考になればと思います。

4500 人、世帯数 1200 という千葉県では一番小さな村で、やはり「道の駅」を作りまして、野菜や花の即売——千葉ですから、花がたくさんあるわけですけども——をやっています。また、房州は畜産というか、酪農の盛んなところですので、その小さな村にいる 60 軒の酪農家が、小さな工場ですけども、ミルク工房を作ったわけです。その技術指導に、今も月 2 回は行っています。この「道の駅」の物産センターも、ミルク工房も村で作った施設なんですけど、運営はすべて村の農民で、おれがかかわりたいと手を挙げた人に任せる。ミルク工房をどうするんだという議論をしたときに、やはり第三セクターにした方がいいんじゃないかという話もあったんですけども、この村で成功している一つの秘訣は、村では建物は作るけれども、運営はすべて農民に任せる。このことが非常に成功の秘訣になっているんじゃないかと思います。今、ドライフラワーをやり始めていますけれども、施設とかについては、ある程度めどがつくまでは行政がやりますけれども、めどがほぼ立ったら、あとはやりたい農民の組織に任せるということでやっております。

私がかかわったミルク工房では、アイスクリームと牛乳とヨーグルト、それからソフトクリームを作っておりますけれども、このアイスクリームがもうとびきり評判がよくて、東京の方にもかなり宅配便で出しています。去年の計画ですと、1 年で 300 万円もうけを出そうという話だったんですけど、もう半期で

300 万円の利益は出していて、村内の人が 5 人新しくそこで働くことができるようになったということで、非常に成果としてはあったんじゃないかなというふうに思っております。

そういうことで、木村さんのところの物産センターでソフトクリームをお作りになったらいかがでしょうか。よく売れるし、また利益が出ます。それで、人も要らない、簡単な機械があればいいということで、これは非常におもしろいんじゃないかと思います。今お話を聞いたような施設は房州にもたくさんできているんですけども、施設は立派につくっても、非常に活気がないところが多いわけですね。ところが、一番燃えているのがこの一番小さな三芳村ということで、これはかなり燃えております。それからもう一つはグリーンツーリズムでつくった三十何人泊まれる宿泊施設ができているわけですけども、この利用率が六十何%だそうです。ということで、当初の計画よりも、かなり成果がいいということのようです。

私もそこにしょっちゅう泊まるんですが、ここでは食べ物その他は一切出しません。自分で作る。平日は 4 人泊まれて 1 万 3000 円ぐらいですね。土曜、日曜、祭日が 2 万 1000 円ぐらいだと思います。予約だけしておけば、勝手に行って自分たちで食事を作るなり、食べ物を持ち込むなりして、勝手に自分たちでそこに宿泊していろんな行動をするということで、非常に人気が高い。施設を作っても、手間は全然かからないということですね。

そういうことで、私の経験のところをちょっとだけご紹介しておきます。

座長 ありがとうございます。

司会としては、せっかくきょう来ていただいたので、報告者以外の駐村研究員の方にも一言ずつお願いしようと思ったんですが、大分時間が迫ってまいりました。そう言いながら、実はお願いしたい気持ちもございます。

私の独断ですが、意見交換という本来の意味に匹敵する意見をおっしゃられるのは、やはり各現場におられる駐村研究員の方だと思います。今、出山さんからいろいろ貴重な情報を出していただきましたけれども、この際何かご発言いただければありがたいのですが、お願いいたします。

井上（駐村研究員） 活性化問題というのはいろんな形で全国的にも言われておりますし、いろんな施策も出されておりますけれども、私は福岡におりまして、非常に活性化した地域と、非常に衰退している地域というのがあるわけですね。立地条件というと、ちょっと問題があるかもしれませんが、同じような地形、同じような自然的な条件を持ちながら、その差があるというところに一つの問題、特に技術的な課題があるんじゃないかなと思います。

例えば私の方で、山間地でありながら、非常に最近伸びている産地があります。片方は、同じ山間地でありながら、非常に人もいなくなったというところがあるんですね。この2者を対比した場合に、そこではリーダーの存在というのが決定的に違うのではないかなというふうに私は思います。

ご承知のとおり福岡県はミカンをめぐる状況が大変厳しい地帯でございしますが、ミカンをやめて花にかわるとか、野菜にかわる、あるいはイチゴにかわるというところには、そこに住んでいるミカンを作っていた人たちが、かなりそういう作目の転換をやりながら残っている。地域の活性化というのは、人が残らないと地域の活性化にならないと思うんですね。お祭り事をして活性化になるかと言えば、私はならないと思います。人が生活できるということが活性化の最低の条件だと私は思いますので、そういう意味におきまして、活性化というのはやはり、生活の場を築くため、もちろんそれを築くのは1人1人の生産者の皆さん方でもありますけれども、それを

導く指導力というのが非常に重要なのではないかなと思います。

片方は同じ条件でありながら何もしない、いわゆる指導者が眠った状態であるところは、平たん地であろうとも、非常に地域がさびれております。地域の活性化とリーダーの存在の重要性ということで私の意見というよりも、感想を述べさせていただきました。

白川（駐村研究員） 先ほどお三方のご報告の中にも、またそれ以外のご発言の中にも結構農協という言葉が出てまいりました。私は農協の職員ですので、大分耳の痛い話も聞かせていただいたわけですが、やはり今は、住専の問題を含めて大分農協バッシングがあるわけです。私は農協に入ってからちょうど26年が経過しました。営農一筋でずっと来まして、今本所に入って、なかなか直接現場には出ないんですけれども、営農の仕事をやっています。きょうの活性化の取り組みというテーマに関しては、今井上さんもおっしゃいましたように、やはりその地区で我々指導に携わったものが、どういう形で組合員に接していくかということが一番大きな問題ではないかなと思います。

うちの農協は広域合併で、12の農協が一つになって遠州中央農協となり、正準合わせると約4万5000を超える組合員を抱えております。そうなりますと、やはり組合員の顔がなかなか見えづらいという問題がでてきて、組合員意識も薄くなるということもあるわけですが、そういう中で、私たちが一番に取り組みしたのは、やはり地域農業をどうするかという形で、指導予算を切らないということでした。これは農協経営が厳しくなっても、絶対3億5000万円は維持しようということをやりましたのと、もう1点は、新しい農業に対しての取り組みで、10億円の特別積立金により、新しいチャレンジをするものに対して、営農振興で出していこうという形でございます。これは合併して3年間で

すけれども、一番多い年で上限 1000 万円と決めたわけですが、2 年目の年に 1700 万円まで出しました。私が入って、ことはちょっと減ったんですけれども、四、五百万円は出しております。それから何が元気になるかということを考えると、やはり女性に生き生きとして農業をやっていただくことがかなり必要ではないかなということで、簡易ハウスの助成という形で、ハウスの建設資金の 1 割、最高 50 万円までですけれども、出しております。こういったことが、地域の活性化につながってくるのではないかなというふうに思います。

先ほどの報告にもありましたが、担い手不足の一番の原因として、嫁不足の問題が出るわけですが、私はこれは農業だけの問題じゃなくて、町場でもすべてそうだと思うんですよ。それは、働く職場というものを確保した女性が、強くなったという怒られますけれども、人生観を持っていますと、やはりそれは仕方がないことだなというふうに思います。

農業だけ嫁さんが来ないということもないですし、当然結婚している人もいるわけで、むしろ、農村の男性がどちらかというとおとなし過ぎるのではないかと思います。そこら辺が、同じように農業をやっている、嫁さんがいる人といない人の差となって出てくる。こういった問題は農業だけの問題ではないと思います。農協として結婚相談事業なんかもやっているんですけれども、やはりまとまるというのがなかなかできません。ですから、ことしで相談ということはやめようと。それよりも、農協として出会いの場を何とかセッティングしてやろうと。テレビのようにはうまくいきませんが、そういうことをやっていって、結びつきの場を考えていった方がいいんじゃないかな、こんなふうに考えております。

うちの方も事業本部制という形で機構改革

を行いまして、農業へのかかわり方といいますか、営農振興に余計力を入れていかなきゃいけなくなってくるので、特に愛東町の木村さんのお話は、うちの方も直売所の問題等もありますので参考にさせていただきたいと思います。これからもよろしくご指導いただければと思います。

座長 ありがとうございます。

司会の不手際でほとんど時間がなくなってまいりました。本当にいろいろしゃべり足りないことはたくさんあると思うんですが、こちらからまたご指名して申しわけありませんが、きょうは官房企画室から任田参事官がいらっしゃると思いますので、感想も含めて少しコメントをいただければと思います。よろしくお願いします。

任田（農林水産大臣官房企画室参事官）

ご指名でございますので、ちょっと感想めいたことを申し上げたいと思います。

お三方、それぞれ条件も違うところで、かなり違った切り口でお話しになられて、それぞれ今の農村が持つ問題、そしてそれをどうやって乗り越えるかということの地域としての取り組み、あるいは個人として取り組んでこられたことをお話しされたわけですが、やはり駐村研究員の方ならではの報告だったなというふうに思っております。

地域の活性化に関して申し上げますと、実は皆さんご承知のように、農業基本法を見直そうということになって、既に取り組み始めておりますけれども、その中で一つのテーマに、農村をどうとらえるかという問題がございます。実はこれを突き詰めると非常に広範といえますが、難しい問題がありまして、先ほどもいろいろ出ておりましたけれども、農業あるいは農村の価値というものを、再構築といえますか、再評価といえますか、そういうことをしないとどうも出てこない感じがあるんです。農業基本法を見直そうということに関しては、ある意味で国民の合意ができてい

のかなという気がするんですけれども、さてそれではどういう方向で見直すかという、これは農業あるいは農村とのかかわり方、距離によって千差万別、各人各様で、極端なことを言えば、日本にもう農業は要らないんじゃないかという人ももちろんおるわけです。一方で、食料は100%自給しなきゃならない人もいるわけで、そういう中で、本当に国民の大多数が納得できるようなものができるのかどうかというのは、実は作業をしながら一番懸念しているところでございます。

結局は、各地域で、農業についての理解者を1人でも2人でも得ていくことが一番大事なのかなという気がしております。恐らく皆さん方それぞれのお立場でご努力いただいていると思いますが、これからもひとつ農業農村のよさを、農業農村を余り知らない人にというんでしょうかね、いろんな立場の人に、事実をもって理解してもらうご努力を続けていただけたらと思います。

きょうはどうも大変勉強になりました。ありがとうございます。

座長 どうもありがとうございました。それでは最後に、今までいろいろ質問、それから意見が出てきたわけですが、報告されたお3人の方に、済みませんが、もう一回一言ずつ、ご感想で結構ですが、お願いできればと思います。順序を今度は逆にいたしまして、斎藤さんからお願いいたします。

斎藤 私は先ほど申しましたように、50年、農業で生きてきました。恐らく死ぬときも私は農民でよかったなと、そういう実感の中で死ぬと思います。ただ作物を作るだけでなく、本当に農民は文化や美術も作ってきたんだ、そういう思いと、そういう生き方を私自身がしてきましたから、決して私は農民になって悪かったというふうに一度も思ったこともありません。

私の女房なんかも農村が嫌で、東京に逃げた女でしたけれども、それを5年間かけて説

得して連れてきまして、一緒に農業をやっています。私はその当時、農業が好きだなんていう女は絶対だめだと。農業が嫌で嫌でだめだという人こそ、これからの農業に耐えていけるということで結婚をしたんです。ですから、数は少なくとも、本当に農民で生きるといことのすばらしさを実感できる若い人たちを、これから何人でもいいから育てていくのが私の一つの務めじゃないかというふうに考えているところです。

武井 農民になってまだ21年目の私ですが、やはり地域に溶け込むのに10年、それからもっと溶け込むのに10年、たまたま畜産の会議があったときに、今ごろになって、かわいい子豚がどんどん育っていくのがおもしろくなったよと言ったら、その担当の年配の人が、それでなくちゃだめなんだよと言われたけれども、そうなるのに、20年近くかかっているなと思います。やはり作物を育てたり、豚を育てるのは、子供を育てるのと同じじゃないかと思います。だから、いい子供を育てるんだったら、私自身がいい豚を育て、いい肉を出荷しなければいけない、これが最後の決意表明です。

木村 先ほどリーダーというお話があったと思います。私も確かにリーダーがいる町、村は活性化しているなと思っています。私も愛東町を滋賀県の中でも、結構リーダーがたくさんいて、非常に活性化しているなというふうに自負はしている1人でございます。寝ている役場の職員ではだめだし、遊んでいる農協の職員でもだめだし、沈んでいる農家があつてはだめだということを私は常に思っておりますので、そういう面では、やはりみんなが一緒になって頑張らなければ地域の活性化はあり得ないと思いますので、そういうつもりで頑張りたいなというふうに思っております。

座長 どうもありがとうございました。活性化というのは、全く語られることは多くて

も、実際、実践はなかなか難しいというものの一つだと思います。恐らくこの会議でもこれから本当の意味で議論が始まるころなので、それこそ議論が活性化する寸前に時間が来ってしまうという、いつもの悪いパターンになりました。恐らくきょうのこの議論で活性化のマニュアルみたいなものがすぐ出るということを考えておられる方はおられないと思います。農業実践、あるいは行政、それから研究、それぞれの立場できょうの議論の中か

ら何かしらヒントが得られれば、それで十分ではないか。これは手前みそでございますが、そういうものとしていろんな意見や情報が出てきたというふうに思っております。

大変不十分でございますが、一応時間が参りましたので、これで今回の駐村研究員会議の報告及び質疑討論の部分は終わらせていただきます。どうもありがとうございます。(拍手)